

11 生きる願いに温かい手そえ

「老人ホームでは三度死ぬ」という言葉があります。一度目は死んだつもりでホームに入る。二度目は死んだつもりでホーム暮らしに耐える。三度目は身内もないまま最期を迎える、という意味です。

ホームを利用する――。たしかに、これまでの生涯を葬る決意をして入居する人もいます。アルバムや日記を焼いた人もいます。

しかし、実際入所して落ち着くと、予想していたよりは、まだと思うのが普通です。何しろ最悪も覚悟していたのですから。最悪より悪いのはありません。食べること、入浴、洗濯、おむつ交換など物的な面では、欲をいわねばなんとか保証されています。だから、問われれば、ほとんどの人が「もったいない」「ありがたい」と答えます。

残念ながら、また、そう言わねばならぬ空気がホーム内に強くあることも事



森山ちよ子さんは読書三昧。日田市の特養・中ノ島園——

実です。ホーム側はこれだけのことをしてあげている、といった態度で臨みがちです。ホーム便り等には「感謝の念をもて」などという言葉は多いんです。その極端な実例はせんだって申しました。「いやなら出ていけ、代わりは幾らもある」式のホームです。これなら当然第二の死を忍ぶ状況になります。

私は本心から思います。この雑居生活、自由のない生活をよく辛抱して下さる、感謝するのはホーム側です、と。

人間はどんな運命の中でも人間らしく生きんとする願いの主体です。この願いのあるかぎり、道を見いだして生きていきます。まさに「生きることは願うことです」(下村湖人)。

高齢で弱って利用する特別養護老人ホーム生活、なおかすかに残る願いにホーム側が温かく手をそえる時、生は輝きを加えます。

「よそめには終着駅と思いに いざ来てみれば始発駅なり」——松本森喜さんの歌です(佐賀県・済昭園報54号)。この歌のように、始発駅と考え直して再出発を志す人は少なくありません。大分県日田市の特別養護ホーム・中ノ島園の森山ちよ子さん(七五)もその一人です。

「玄関で車いすにのせられて花束を頂いた。これでびっくりしていると、寮母さんたちが並んで拍手で迎えて下さった。部屋の入りに口には花を描き『歓迎』と私の名前を書いてあった。来てよかった!」

うれしい仰天。園の心配り、応える森山さんの心、あとはすべてよしでしよう。

「園内の温かいこと春のようです。自由に自分のやりたいことができるとは。それを思い、これを思い、ここは天国」（園報15号）。

「今までやったことのないラジオ体操、習字、音楽、踊り、手芸。人前で歌ったこともないのに歌ったり、初めてのことばかり。できてもできなくても、体を動かし頭を使い、一日も長く元気でいたい」。

ここには森山さんの自由な主体的な生き方があります。だから森山さんは楽しいんです。赤星副園長にしみじみと語っています。

「私はずいぶん働いてきました。炊事、洗濯が全くだめになったので、死ぬ前一年間でよいから、ゆっくりしたいなあ、と思っていました。それが、今なの。あんまり希望通りなので、夢なのかな、長く続くかしら、と時々、不安になります」。

なんという謙抑（けんよく）。運命をせいっぱい生きる者の姿は輝いています。命の美しさに触れる思いです。

二年後、赤星さんから森山さんのその後のお知らせです。

「昨年ひどい骨折をされ三カ月入院され、長い薬服用期間で骨はぼろぼろになって、補助具をつけたまま暮らされています。何が起きてもそれを受けとめ、明るく暮らす彼女には、いつもながら敬服いたすばかりです」。

ホームの職員が、このように謙虚であれば、高齢者皆がかくも見事に生きられるのです。「生きることとは願うこと」。師の言葉を繰り返えしたい。